



8. 具体策RINGo!とは

18

県内の高校生対象のICカード

ネーミングに込めた願い

**RINGo! RIN=輪をつなげていく、
行って(足を運んで)つなげる輪**

1. 交通手段を確保⇒高校生の流動化。
2. ポイントを学びに活用。
3. 人材バンク登録者の学びの機会を増やし、バンク人材を活用。

RINGo! の使い方

19

- RINGo!⇒「高校生人材バンク」とRINGo!専用アプリに登録

•バスや電車の利用(交通の利便性)

公共交通機関の利用促進

•図書館利用、書籍購入(学び)

高校生の観光や訪問前後の学習を促進

経済格差や交通機関の利用の不便さなどの格差を是正

RINGo! ポイント活用

20

①書籍の購入促進・・・高校生は学ぶべし

モデル:八戸市のマイブック推進事業⇒継続希望の声多い。

効果例 1. 読書について話題にする児童が増えた。
2. 来店する客層が広がった。
3. 書店の売上が伸びた。

(八戸市HP: <http://www.city/hachinohe.aomori.jp/>)

- 青森県特設コーナーの設置(ポイント高!)
→勉強や地域の歴史・文化の学習を勧める
- 一定のポイントを貯めて本一冊ゲット!

②図書館の利用の推進

青森県についてより関心を持ち、自ら学ぶ!

この「RINGo!」は、県内の高校生を対象としたICカードです。「RINGo!」の「RIN」には輪をつなげていく、そのような意味が込められています。あらゆる地域の方のところに自ら出向き、県内のいろんな人たちと新しい出会いを通して輪をつないでいく、そのような思いが込められています。

このICカードには3つの機能が備わっています。1つ目は交通手段を確保すること。これによって高校生の行き来が容易になります。2つ目は貯まったポイントを学びに活用することです。3つ目は人材バンク登録者の学びの機会を増やし、バンクを活用することです。(18)

「RINGo!」カードに登録すると同時に人材バンクと専用アプリに登録されます。「RINGo!」に加盟している図書館や本屋での書籍購入、バスや電車といった公共交通機関の利用でポイントが貯まります。バスや電車の利用で公共交通機関の利用を促し、図書館利用や書籍購入にポイントを付けることで、高校生の観光地や訪問先への学習を促進し、経済格差や交通機関の利用の不便さなどの格差を是正します。(19)

私たちはこの貯めたポイントの利用方法として3つの方法を考えました。

1つ目は、一定のポイントが貯まると書店で本が1冊無料になるというシステムです。このシステムは八戸市の「マイブック推進事業」にヒントを得ました。本屋では「RINGo!」ポイントが高い特設コーナーを設置してもらい、そこには青森県の歴史やその土地の文化に触れられる書物を置き、たくさんの高校生に読んでもらいます。それにより地元や青森県について今まで以上に関心を持ってもらい、理解を深めてもらうことができるのではないかと考えました。

2つ目は、図書館でポイントが付くことです。(20)

21

③バスチャーターシステム

○専用のアプリを使い、友達とRINGo!ポイント共有して利用するシステム

人数、名前、場所、日時をアプリで入力 → バス会社と相談

↓ 承諾を得て...

行きたい場所へノンストップで行くことができる!

高校生自ら企画し、自主的な学習ができる!

22

9. RINGo! 実用化コストの試算

予算1人1年2,000円×青森県内の高校生^{注1)}38,223人(H28年5月) = 76,446,000円

一人当たりの補助2,000円×3年間=6,000円

3年間の支出概算 6,000×38,000人=2億2800万

注1) 資料平成28年度青森県教育委員会学校一覽調査資料No. 1

地方創生拠点整備交付金の交付対象事業に申請

しごと創生・・・観光振興等
 地方への人の流れ・・・生涯活躍のまち、地方創生人材の育成・確保等
 まちづくり・・・小さな拠点、まちの賑わいの創出等

23

10. RINGo! + 高校生人材バンク

他地域の高校生や観光客

地元の高校生も訪れた高校生も体験・学習できる

八戸

案内・ガイド・講師

八戸の高校生

24

RINGo! + 高校生人材バンク

・ガイド、講師例

名所・・・祭り、種差海岸、三沢基地、航空祭、アメリカンデー、
 蕨島、縄文遺跡、朝市、酸ヶ湯、雪の回廊など

文化・・・青森出身の作家、祭りの笛、訃り、せんべい汁、
 ゆるキャラ、B級グルメ、伝統工芸など

産業・・・企業、農業、水産、工業

研究・・・防災、環境

◎八戸北高版人材バンクのご紹介◎

- ・防災体験(2人)
- ・防災教育(38人)
- ・神楽(2人)
- ・蕨島とウミネコについて(1人)
- ・三社大祭お囃子(22人)
- ・えんぶり舞(6人)
- ・種差海岸(18人)
- ・是川縄文文化(5人)
- ・郷土食(38人) ・八戸朝市(3人)

3つ目は、バスチャーターシステムです。貯めたポイントを「RINGo!」を利用している友だちと共有し、行ってみたいけれど行くための交通手段がないという高校生が利用できるバスチャーターのサービスです。具体的なプランをバス会社と相談し承諾を得て、ノンストップで行きたいところに行くことができます。

自分達で行きたい場所を調べることで、今まで知らなかった場所にも興味を持つことができます。さらに実際に自分達の間で見たり聞いたり直接体験することにより、ただ知っているだけではなく、自信を持って青森県の魅力について紹介できる人材の育成につながります。(21)

「RINGo!」実用化コストの試算についてです。予算を1人2千円とし、県内全ての高校生を対象にすると7,644万円となります。その補助金を得るために交付対象事業に申請してみるのはいかがでしょうか。(22)

「RINGo!」を使って学んだ知識を活かす場となるのが高校生人材バンクです。高校生人材バンクとは「RINGo!」カードをもつ高校生に登録してもらい、その高校生がその地域の名所や文化などを、他地域の人が来たときにガイドするというシステムです。

ガイドをすることで、普段職場体験などの社会に出る練習をしない普通科の高校生も社会に出る体験をすることができます。ガイドする相手は、県内の他の高校生から県外の方まで様々な人を考えています。(23)

このシステムを使うことで、地元の高校生はガイドをするために予習などで知識を蓄えますし、他地域の高校生も実体験に基づく学習ができます。北高生の中で、ガイドしたいものについてアンケートをとったところ、このようなものが挙がりました。(24)

高校生人材バンク人材の育成

- ・国内の観光客へのガイド
事前研修を行い、プロのガイドさんから
観光地の情報やガイドのコツなどを教わる
- ・国外の観光客へのガイド
国内のガイドへの研修のほかに
三沢基地の方々に協力してもらい
英語でのガイドの練習をする
→普段はなかなかできない国際的な体験ができる

注目したいのが、防災と震災に関する講師をしたいと考えている生徒が40人もいることです。見学し実体験をして学んだことは学習し続けるという態度が表れています。(24)

具体的には、本校には東日本大震災が起きた当時、「探査船ちきゅう」に乗船していた仲間がいます。彼らは津波を回避するために沖に出て一晩船の中で過ごしました。そのときの乗組員の対応は一生忘れられないものだったそうです。この体験を防災教育というところで活かしていきたいと考えている人がいます。

11. まとめ

RINGo! ⇒学んだことを青森県へ還元

- ・RINGo!を使って得た体験を大いに活用し、高校生人材バンクで学んだ経験をいかして
県内外で青森のPR・人と人、人と物、物と物をつなげてもらう。
進学などで県外に転出して青森に関わり続ける

実体験⇒関係人口増加へ!

高校生ガイドには事前研修を受けてもらいます。地域の歴史などの情報だけでなく、プロのガイドからコツを学んだりします。他にも海外の方をガイドするために、ALTの方や三沢基地の方に協力してもらい、練習することなどを考えています。このような国際的な体験はなかなかできないので、実際に学校で学んだ英語を使う場所にしたいと考えています。(25)

参考文献

- ・都市と地方をかきまぜる「食への通信」の奇跡
(光文社新書) 高橋 博之
- ・地域再生の戦略―「交通まちづくり」というアプローチ
(ちくま新書) 宇都宮 浄人
- ・地方消滅 創生戦略篇 (中公新書) 増田 寛也・富山和彦
- ・地方創生拠点整備交付金の交付対象事業の決定について
(平成29年3月3日内閣府地方創生推進事務局)
- ・まち・ひと・しごと創生本部HP
<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/sousei/>
- ・八戸市HP
<http://www.city.hachinohe.aomori.jp>

まとめです。このように「RINGo!」は高校生に学習を促進することで、それが青森県に還元してくるというシステムです。県外に出ても、その地で出会った人に「RINGo!」のシステムを使って学んだことを広めていき、実際に行って学んだ生きた知識を発信します。そうすることで、青森県により興味を持つ人が増え、関係人口が増加します。関係人口が増加すれば、県内に来る人が増えたり、県内に関心を持つ人が増えるので、おのずと青森県が活性化していきます。(26)

高校生はこのような学習が出来ればしっかりと青森県に還元していきます。ですからぜひ、高校生の将来性と学習意欲に期待して投資していただければと思います。このシステムをどうかよろしくお願ひします。

【質 疑】

● あんどう はるみ 安藤 晴美議員（日本共産党）

（安藤議員）

高校生にとって教室の中での授業だけではなくて、実体験というのはいかに大事かということをお話を今日とても学ばせていただきました。そして「RING o!」というカードを活用したいという提案の中で、1人2千円を拠出してそれを1つの財源に、このシステムを作りたいというお話でしたが、カードを作る主体はどこを想定しているのか。また、カードの活用の仕方をいろいろとお話されたのですが、このカードを取り仕切るところはどういうシステムになるのか、その辺をお聞きしたいと思います。

（回答）

運営主体はあまり考えていなかったのですが、「RING o!」のシステムに加入してくれたお店や学習する施設に助成金などを渡して、カードを持っている高校生が訪れたときに、このような体験をする際の手助けを行ってもらおう。本屋だったら本を1冊貰えるなど、高校生が実際に行ったときに利用できるというシステムを考えていました。

（安藤議員）

現在はカードで買い物が出来たり、駅を通過できたり、そういうカードの利用の仕方があるものから、このカードはそういう磁気テープがついていて、何か利用する度ごとにそれが記録されていくもののかなと思ったのですが、今のお話によればもう少し単純なもので、そのカードを提示することで、協力して下さるお店だとか施設だとかで特別な配慮をしていくという、そういう制度という理解でよろしいですか。

この提案がもし実現するとしたら県内の全ての高校生達に発信していきたいということでもよろしいですか。もしそうであればどのように発信していくと良いと考えておられるでしょうか。

（回答）

カードの仕組みについては、そのとおりです。カードについてもそうですが、「高校生人材バンク」、他地域から来た人々にその地域の文化を発信していくというシステムも広げていきたいと考えています。将来的には、県内だけではなくて全国、世界に広げていきたいと考えています。その対象は、高校生だけではなくもっと広い範囲を考えています。

（安藤議員）

新しいシステムを活用して、それが青森県の活性化につながっていけるようなものになればいいなと思います。ぜひとも皆さん、県外に出て行かれる方もこれから多いと思うのですが、学んだ青森県の良さを、十分頭にきちんと入れて、いずれはぜひとも青森に戻って来たり、青森に関わる人口を増やしていくことに貢献していただきたいと思います。今日はありがとうございました。

● きくち けんたろう 菊池 憲太郎議員（自由民主党）

（菊池議員）

「関係人口」という言葉が出てきましたけれども、これと最後の「RING o!」カードに行き着く過程というのがなかなか見づらいかないという感じがしたのですが、この点をもう少し具体的に分かりやすく説明していただけないかなと思います。

(回答)

「RING o!」カードというのは県内での高校生の行き来を盛んにしたいというところから始まりました。例えば、八戸からだと弘前城に行こうと思っても簡単には行きませんが、実際に行くと、八戸には無いこんなすごい大きな建物があってとか桜が綺麗でとか、そのような魅力を感じられると思います。感じた魅力というのはインターネットやスマートフォンで見ても伝わらないし、インターネットなどで見るニュース等では文面がまとまってしまっていて、自分で考えるという余地がない、思考することができないので、実際に自分で行って感想を持つということが実体験の大切さだと思います。

そして進学などで県外に出て行った場合に、実際に感じたこと、感じた魅力などを発信できればいいなと思っています。実際に見聞きした青森県の魅力をしっかり発信していく、そうすると発信していった地域の人たちが青森県に関心を持ってくれる。青森県に関心を持ってくれるということは、青森県に実際に来てくれたりだとか、青森県産品を買ってくれる。

そのように、青森県を身近な存在だと思ってもらえれば、それだけで大きな影響があるのではないかと感じます。ですからまず、発信するための土台作りとして「RING o!」カードというものを考えました。

(菊池議員)

基本的には青森県の情報を発信するために、県外に出て行く高校生であったり、働きに出て行かれる方に媒体として情報発信をしていただくという考え方に基づいているということですね。わかりました。

考え方は今の時代に合っていると思っていて、財源は補助金ということで、そういうことも先々考えておられると思うんですが、投資という意味合いからすると、できればいろんな方に負担してもらうことが必要なんだろうと。例えば我々も県民として1人1人がお金を出す、あるいは関係している会社企業であったり行政であったり、様々なところで分担し合うということも必要なんじゃないかと思いました。

補助金というものも一時は必要かもしれないですが、最終的にずっと持続していくためには、やはり地元で根ざした企業であったり賛同してくれる方々、そういう資金をもっともっと活かせるようなかたちにできればいいかなと思います。